但以現書の秘語的部分から引用されてあるもの一つ。――

萬物の頌

基督教公會の讃美から一つ。――

讃美の頌。恐らく第四世紀の著作であらう。

頌語

(三)凡ての頌歌には榮光の頌が附加されてあるが、讃美の頌のみ獨り之を缺いて居るのは奈如なる理由であらうか。其の理由は至極簡單である、即ち是等の頌歌は基督教的天啓の完了前に著作せられたものであるから、基督教々理獨特な聖三一位を概括した句を附加して之を新約化するのである。然るに「讃美の頌」には既に此のことが內容中にあるから之を附する必要を感せぬのである。

換歌と本歌

(四)次に如上列記した頌歌を如何に使用するのであるかといふと、何れでも其の時と場合に應じて適當なものを常に用ゆるといふより外はない。復活日、聖靈降臨日及び特別な感謝の日(勿論クリスマスの季節內の日は別として)なぞには福音書から採つた靜かな歌よりは、其の換歌である早禱の詩百篇や晩禱の詩九十八篇の方が一層其の時に適した歡びを言現はす樣に感ぜられる。

より詩六十七篇が適して居る。又收獲感謝祭にはシメオンの頌ることは看過す可らざる特色である。總じて頌歌の多くに傳道的調子のあは確かに典據と慣例に依るものであるが夫れは大齋が、斷食節であるからでなく、單に春季に相當するからである。依て此の立場から考へると、是れを昇天前祈禱日や收獲祭等凡て自然界に於ける神の賜を思ふ時に用ゐて差支ない。然し大體に於ては換歌より初めにある本歌を使用す可きである。然からざれば本歌の本歌たる所以は毫もないわけにもなる尙本歌を用ゆる二つの理由がある。一つは何の式の本

歌も皆新約聖書に錄された純粹な基督教的歌で、ユダヤ教會のよりは確かに優れて居ること、又萬物の頌以外の換歌は皆詩篇から採つたものであるが此の詩篇は毎月一回教會の禮拜用に用ゐるものになつて居る。然るに本歌は聖書として朗讀されても禮拜用には決して使はれないものであるから勉めて之を使へといふことである。詩篇の頌歌に付ては最早一言もしないが、他のものに付ては少し話して見たいと思ふ。

萬物の頌創造の讃美

萬物の頌――是れは創造の事蹟から創造主を頌讃へた一つの長篇の讃美歌である。此の種の歌で早く作られたものは詩第百四十八篇が其の一例である。後のものでは、ミルトンの失樂園にある朝の歌を推さゝるを得ない。該詩は詩といふ詩の中でも此の種の思想を歌ふた上乘なものである。其外之を歌ふた高潮な詩は擧ぐるに遑がない程である。

出處

萬物の頌は非常に高潮な歌とはいへないが、最も整備した完全な歌で、會衆が一緒に誦ふに適して居る。其の出處は但以理書の一部からであるが、該部は同書の希臘譯のみにあつてヒブル語の方に載つてない。其の作成に付ても傳說的な起原說があるが信ずるに足らぬ。從て此の頌の終にある『アナニアスよ、アザリアスよ、ミカエルよ云々』といふ句は、日米の祈禱書に之を畧されてある。但し但以理書及び英祈禱書にはある。

年代

萬物の頌の出來た年代はほゞ紀元前二百年位に相違ない。

頌の順序

偖て是から此の頌中神の事蹟を述べた順序に付て少し話さう。先づ第一節は全體を包容して述べた序である。此の歌に述べてある創造の順序は大低創世紀第一章に錄した通りであるが、他のものが入

後半部の内容

つて其順序を中絶して居る所もある。而して此の歌の後半部は第十八節の『地よ主を祝ひ』に始まる。此の節迄は天上のことのみを歌つたのであるが、是れから地上地下の萬物に就て歌つてある。夫故創世紀一章で日月星晨の前に記されてある大洋、河海、洪水、植物等が萬物の頌では後半部の地上界の内に錄されてある。其他は殆んど創世紀の順序通りである。天使は神が創造と統治の爲に用ゆる力として初めに錄されてある。『蒼穹の上の水』は古い特色のある句である。而して『主の萬軍よ』が其の後に來て居るのは少し可怪が、多分詩百四篇の『風を使者とし焰の出づる火を僕となし玉ふ』といふ句が天空のことの後に錄されてあるから、夫れと同じ樣な位置に置かれたものであらう。但し此の詩も創世紀に基て居る。

人の部

次に魚屬、鳥類、野獸から直ちに人類に付て歌ふて居る。而して人の部は割合長く別に一部を爲すかの觀がある。其の順序は一寸了解に苦むが先づ人類全體次に神の撰民祭司といふ順に歌たので是迄は困難がない。然るに何故『主の僕』が祭司の後に置かれて居るのであらうか。元來此の僕は一定の意味で曰へば「レビ」か其他の下役或は三聖兒の樣な、特別な使命を有するものを指すのであるから後に置くのは其の意を得ない。又何故聖き死を遂げたものゝ句の次に『心清よく遜れる者』を歌ふのであらうか。何故其の前の生きた者の歌の内で之を歌はなかつたのであらうか。此の點に付て自分の與へ得る暗示は左の通りである。即ち此の句は生者死者凡てを總括した意味で錄されたものなること、或は此の句を以て傳說上此の歌の作者として居る三聖兒のことを考へる便にしてあるといふことである。

ザカリアの頌

ザカリアの頌――に付ては左のことを一言して置く。

舊約と新約の連鎖

本歌は聖路加福音書から採つた他の二つの歌の樣に或は夫れ以上に、舊約聖書と新約聖書を結ぶ鎖の如き觀がある(其の二、三、五、六、九、十一、十二、の各節には特別な舊約の引照をしてある)又他の二歌同樣キリストの降世から受ける世の祝福に付て記してある。

第八節

第八節は第二部の起首で施洗者ヨハネの誕生と事業に付て記してある。

又此の節に「預言者」は備ふる者で何も預言をする者でないことを定義してある。是れは一寸興味のある事である。

第十六章　信經及び問安

禮拜式の轉換部

我らは今早晩禱式の中心に達した。此の中心と謂ふのは式の轉換點といふ意味で、少しも重要な部といふ意味ではない。禮拜式には始め序の部即ち準備の部(懺悔、赦罪)があり、次ひで主禱文と讃美、敎訓の部がある。而して此の部に伴ふ儀容は立つのと座るのとであつた。然し信經と問安以後は祈禱の部に入るのであるから、跪いて祈願感謝を爲し又終りの祝禱を受けるのである。若し此の間に立つことがあるとすれば、讃美歌を歌ふ時だけである。元來此の讃美歌を歌ふのは規則の許す處ではあるが正則な禮拜式の一部とはいへない。たゞ姿勢の疲れるといふ處から常用特禱と代禱との間に之を挿入して休息の折を與へるのである。

信經に關する二問題

信經に述べられてある教義に付ては、問題外に亘る恐れがあるから他日に讓つて、今日茲で御話しようと思ふのは左の二點である。

(一)信經の起原と目的は如何。

(二)公會が日常の禮拜式に信經を用ゆる本意と、之を現在の位置で使用する理由如何。

公會が信經を常用する濫如何注意すべき三點

順序として(二)より説明しよう。

(二)(イ)先づ注意す可きことは、我儕が共に之を誦すること。(ロ)次に爰で用ゐらるゝ信經は使徒信經即ち凡ての信者が教會の一員となるとき、第一の誓として用ゐる洗禮の信經であること此信經は全公會議が教義の要諦を示すものと認容した彼ニケア信經即ち吾人が聖餐式で用ゆる信經の様には細節に亘つて居らぬ。從て三歳の兒童も能く之を知り、主禱文十誡を記憶る様に衆と共に之を口にすることが出來る。

信經は符號なり

(ハ)信經は神の御前で稱へるけれども神に向つて言ふのではない。爰で「神に向つて」といふのは、感謝祈禱を神に献げるとき、神に向つて言ふのと同じでないと謂ふ義である。寧ろ是れは小兒が父の前で學課を復習したり、幼ない祈を獨りで言へる様になるまで父に言ひきかせるのと同様である。實に信經は我ら互の信仰を言明すので、神に向つていふのではない。(「願くは主なんぢらと倶に在ますことを」と言ふのも我ら互に言ふのである)。是んぢの靈と倶に在ますことを、願くは主なれ恰も現今行はる丶『共濟結社』の暗號の様なもので、結社の一員は暗號を使つて他の一員を見出し、互に我儕は一團體に屬するものであるといふ自覺を起すのである。

基督者は皆一軍に屬する兵卒である。靈魂の敵は絶えず彼等を圍繞して居る。然し幸に隊長が彼等に與へた符語は、味方同志を識別する

交誼の告白

ことが出來るのである。往昔、基督教が未だ禁制の宗教であつた時代には、禮拜式中更らに信經を用ゐなかつた。たゞ用ゐなかつた計りでなく、之を書きつけることも爲なかつた。何故かといふに、若し之を書きつけるならば、固々信者でない迫害者迄も之を熟知する樣になり終に斯る人が間諜となつて基督者の集會に臨み、誰と誰は信者であるといふことを調べても判らないからである。

前にも斷つて置いた樣に、恁かることを言ひ始めると、問題の枝葉に亘る恐れがあるから、本論に反て今一言、信經が禮拜式の中央で基督者の交或は兄弟の誼を表はす行爲であることをお話したい。此のことに付ては信經の内にも『聖公會聖徒の交』と記してある。即ち信經は之れが爲に用ゐらるゝのである。我等全會衆が相和して之を唱へる時吾らは今、日、英を問はず、何處も自由に信仰を告白し得る昭代に生れしを謝し誠に相互の交を感ずる。而して其の交はたゞに一公會に限られたものでなく、全世界に亘る公會の誼の感でなければならぬ。凡てが擧つて『多くの證者の前に(同じ)よき證』をなさなければならぬ。之に依て何處の者も皆悉く同じ將軍の麾下にあつて事を共に爲すといふ力を實顯することが出來る。山里に於ける少數の信徒も『諸國、諸族、諸民、諸音の中より誰れも數へ盡すこと能はざるほどの許多の人』が自分の背後にあつて同樣の信條を用ゆるといふ安心を得るのである。

信數とは何ぞ其起原は如何其目的は如何信經如何と教理と

是より(一)の問題に戻らう。

(一)信經とは何ぞ。其の起原は如何。其の目的は如何。

信經は教義の要諦を錄するもので、聖パウロの言つた如く『眞の言の模楷』即ち我らの信仰が誤解され易くない樣に說述したものを指すのである。而して教會と密接な關係のある此の教理は聖書を唯一の憑據

として作られて居る。然し爰で聖書と云ふのは即教會――基督者が其の信仰と行動を共にする所――が最初から熟知した信仰と教訓を謂ふのである。教會は教理を作らぬ。唯之を受け之を傳へたゞけである。信經は聖書と全然其の形を異にして居る、恰も道德が教訓を含む寓話と異つて居ると同樣である。然し寓話の内にも道德を求めれば得らるゝ如く聖書の内にも信經を見出すことが出來る。信經と聖書との關係に付ては大綱の第六條及び第八條に明記されてある。以下信經の内に記されない教理が澤山あるから其の例を擧げよう。主の事蹟と道德的教訓に付ては、三信經中何事をも記さない。主の先在に就て使徒信經は殆んど何事をも記さない、彼の人たることゝ神たることゝの關係及び聖靈の本性に付ては全然記す處がない。而して使徒信經にもニケア信經にも聖三位の教理に付ては明かに記す處がない。又「靈感」に付ても『預言者によりて語り給ひし主(聖靈)なり』とある外何の錄す所もない。然し事實に於て基督者の凡ての信經の基礎は洗禮のとき用ゆる三つの御名であつて吾人が三位一體と稱する神の三つの存在に基くのである。基督者の信經に於て三つの神位を記さぬものはない。使徒及ニケア兩信經の各段には聖三位の本性と働きに付て記す所がある、殊に其の第三段は聖靈が何であるか又何を爲し給ふかといふことだけを記してある。聖靈が「ペンテコステ」に始めて降つた時に、聖公會即聖徒の交誼が始まつた。而して神の働きが我らの爲でなく我らの内に成就した。即ち聖靈は『罪の赦免、身體の甦出、永生の命』となつて我等の内に働き給ふたのである。

偖て予は次に洗禮の式語が凡ての信經の楷梯であつたことをお話したいのであるが夫れと關聯して信經が固と洗禮の準備的教訓から徐

々に發達したものであることも御話したい。

目的と起原

然らば信經の起原は如何といふに其の目的と關聯して三つの主な方面がある。

正確なる教理の言明

(イ)本書の初めに述べた通り、聖パウロ聖ペテロ聖ヨハネ及び聖ユダの書簡中には是等の使徒が其の逝去の準備として、或る重要な眞理を言明する爲に或る正確な語句を敎へたことを記して居る。聖パウロはテモテ及びテトスが是らの語句を敎へ又之を次の後繼者に傳へる樣命じて居る。固より是等は未た信經ではなかつた。又夫を完全なものとする企もなかつた。たゞ或る特別な眞理を現し又誤解を防ぐに最も適した言葉であるとして承認された迄である。從つて始めは敎理の體系なぞを具備せず、或る者は完く敎理外の道德上のことであつた。夫が漸々種々の場合に遭遇して更に明かな定義の必要を感じ又之が補はれて終に完全な敎理の體系を備ふるに至つたのである。

洗禮志願者及び異敎徒の端緒と信經の關係

(ロ)斯く完全な敎義體系の要求を感じたのは「洗禮志願者」に洗禮の準備をする必要から起つたのである。敎訓が斯く系統的に發達しようとする兆候は既に使徒行傳第十九章第廿三節にも現はれて居る。即ち聖パウロは聖靈に付て知らぬ人は洗禮を受けることが出來ぬことを承認して居るではないか。

洗禮の時の信經も敎理の言が新らしい問を起されては漸時に明瞭となつた樣に漸々と發達したものである。其の初は「共濟結社」の印の如く不文であつた。然れば迫害が止んだ後に用ゐられたといふエルサレムの聖シリル(紀元三百四十八年)の信經の如きも、彼が「洗禮志願者」に敎へたと云ふ備忘錄の此處彼處から一句宛集めて之を合せなければ判らぬのである現今我らの洗禮に用ゆる使徒信經は羅馬公會及び大低

の西部公會の洗禮信經である。

公會の信經は固と不文であつたから之れに變更を來すのは當然である、然し其の變更は敎理の內容でなく、之を表はす言葉とか箇條の數に過ぎぬ。當初何れの信經も全公會から形式的に公認されたものでないから言葉の變更は自由であり又地方的異端に遭遇して新らしい箇條も加へられたのである。彼の『陰府に降り』といふ句は使徒信經最後の追加で紀元四百年頃アクイリアに於ける主要な敎會に行はれた洗禮の敎訓中に始めて書されたものである。斯曰へば當時は何れの信經の言葉も不變な典範として公認されないから自由に變更が出來たと思ふであらうが、實際は之に反して居る。彼等の中には不思議にも保守的精神が充滿して絕對的に必要なものでなければ、決して、其の變更に同意せ無つたのである。斯かる精神は後代の羅馬敎會內にあつたであらうか。若あつたならば多くの弊害は救はれ又基督敎世界の合同は今日より一層の光明があるであらう。

然し又歲月の推移と共に新らしい定義も必要である。何故なれば或る異端は敎會の敎理に似た擬說を敎へ、又古き語に新たな內容を加味せんとしたからである。而して斯の如き場合には大會議が召集され異端の主張する新說が審議され全地の基督敎會から集まつた者が各々其繼承せる處を比較し、今我等は何を敎へて居るか、又各地に開基以來傳へられた古き敎理は如何なるものであつたかといふことを彼此對照して其の意を闡明し、決して公會議が單に新らしい信經を作るために會合したことはない。

ニケア信經は斯の如くして作られたのである。當時集つた諸監督は『是れ〳〵が今予の敎へて居る所で、予の前任者から受けたものと同樣である。』といつた後に、彼等の照合せた

不文の洗禮信經から一つを撰び、之を逐條審議に附し、果して『一たび傳へられし』古き信仰であるかを審べ、更にアリウスが誤つた點を明にするために二三の語を附加したのである。實に公會がニケア會議で公定した信經は、たゞ彼等が使徒時代から繼承した、傳說を證したに過ぎないのである。公會議が信經を議定したのは此の新らしい境遇に應じた處置で、爾來信經は新らしい異端說に對する擁護的使命を有するに至つたのである。

結論

(ハ)要するに信經の目的は左の通りである。

一、洗禮志願者の敎訓用の言葉として。

二、基督者の團體の符言として。

三、誤れる新敎理に對する擁護として用ゐられるのである。

問安

祈禱書の禮拜式では、キリストの兵卒である兄弟及戰友が共に其信仰を告白して後に會師と會衆とは互に挨拶を交換し、各の上に祝福のあらんことを祈つて居る。

思ふに茲にある『願くは主汝らと俱に在ますことを』といふ句は、ポアズが其收獲人にいつた挨拶であることは既に諸君の氣附かれたとであらう。其の答の『願くは主なんぢの靈と俱に在ますことを』といふ句は、諸所に散見するが、恐らく加拉多書の中の末尾から引用したものであらう。

第十七章　短句及び應答

短句より跪く

日本の祈禱書は英國のと同じく問安に續いて直ちに『我ら祈るべし』といふ言葉がある、是れと共に會衆は跪き以後祈禱と感謝のみを献げて、讃美や教訓は再び之を爲さない。

日、英、米に於ける相違の理由

たゞ英國祈禱書の異ふ所は、此の短句の前に『小嘆願』或は『カイリー、エライソン』と稱さるゝ主よ憐み給へ云々の句と頌語のない主禱文の稱へらるゝ點である。

而して日本の祈禱書が之を省略した理由は亞米利加のに倣つたからである。然らば亞米利加祈禱書は何故又之を略したかといふと、主禱文は既に前に使用したのであるし、尙嘆願を早晩禱に續いて用ゆれば都合三度使ふ樣になるからである。又聖餐式があれば更らに二度使はれるとになる。勿論斯く屢々主禱文を用ゐたからとて必ずしも夫れが『無意義』の反復とは言へない。我々が之を用ゆる度に心を集中させ或る「目的」を立てゝ別な方面を强く祈れば頗る有益であるが、若し禮拜者に思慮が足らないと往々『無意義』に流れ易いのである。兎に角、英國祈禱書が主禱文を茲に置くのは前にも一言した通り、主禱文を主な所に置くといふ主意から出たので恰も讃美の前に之を稱へた如く、今又教會の祈禱を献げる初めに當て之を誦へるのである。

小嘆願

元來嘆願とは短い懇願を列らねたものである。而して茲に曰ふ「小嘆願」は其の小なるものである、前述した通り、此處には略かれて居るが、「リタニー」の主禱文前及び多くの臨時諸式中には載つて居る。小嘆願は定まつた懺悔文のないときに、之が代用を爲すもので短い痛悔的行爲を表するものである。其の起原は非常に古いもので東西兩部公會の

禮拜式が分裂する以前に既に存して居たに違ゐない。但し東部には少し趣を異にして居る點がある、即ち『キリストよ憐み給へ』とは決して言はないで何時も『主よ』と記してある。

短句と應答

短句の用法

偖て是れから六對の短句と應答に就て說明を試みよう。

(一)爰にある樣な短句と應答は祈禱書中多くの禮拜式に錄されてある而して若しも會衆が聲高に之を唱へる樣に敎育されてあれば式全體を一層會衆的に興味あるものとならしむることが出來る。然し此の目的を達するには、始終日課や說敎に注意して短句の意味や應用に就て考へなければならぬ。

其出處

(二)短句と應答とは、殆んど凡て聖書殊に詩篇から引用されてある。前に讃美の頌を講じた時、最後の八節は固と短句應答であつたが、其後本頌の一部となつたといふことを述べたが、其の折既に引用上のことに就ては一言した樣に覺えて居る。

同句

(三)同じ句が屢々短句應答として用ゐらて居る。例へば『主よ、主の民を救ひ給へ。主の嗣業を祝し給へ』といふ句の如きは讃美の頌にも爰にも引かれてある。

短句の變遷

(四)短句はもと爰にある樣に、澤山一緒に纏められてあつたものではなく各祈禱の主旨に適ふ一對の句だけを其の祈の前に唱へて、是れが準備となしたものである。夫故今ある短句と應答には依然此の痕跡が殘つて居る。第一の對句は(詩八十五〇七より)毎日變更される其の日の特禱と照應する樣極く一般的なものを撰んである。斯く意味の廣い對句でなければ此の用にはなり難い。

第二の對句(詩廿〇九)『主よ我が天皇を救ひ給へ。我らの籲ぶとき憐みて應へたまへ』は確かに天皇のための禱と照應して居る。第三の(詩百

三十二〇九）『主よ、義しきを以て主の使者を裝ひ給へ。主の聖徒を喜ばせ給へ』は聖職と信徒のための祈に應じて居る。其の次の對句（詩廿八〇九）は恰も第一の對句の後半句を繰返した樣で何故爰に置かれたか了解に苦む。第五（主下廿〇十九比較）の『主よ我らの生涯泰平を與へ給へ。地のはてまで戰爭をやめしめ給へ』は、早晩禱の第二特禱の「平安のため」の祈に照應して居ることは明かである。最後の美しき二句（詩五十一〇十、十一比較）は少し適當しないが兎に角第三特禱に照應させたものであらう、更に後に戻つて興味ある第五の對句の歷史に付て少し話さう。

第五句の歷史

此の對句の古い固の後半は現に英國祈禱書にある『蓋、主よたゝ汝のみ我らのために戰ひ給へば也』といふのである。偖て此の句は一見戰の時だけ神が我等を守るのであるから我ら汝に平和を求むと』云ふ風に、神の助がさも足りぬ樣にとれる。勿論眞意はそうでない『主よ我儕を導きて（今の）戰より再び平和に至らしめ給へ、我ら此のことを主に求む、蓋は多くの人の他に賴む時我儕は主に賴ればなり』といふ意味である。（詩廿〇七の『あるひは車をたのみ、あるひは馬を恃みとする者あり。されどわれらはわれの神の名を稱へん』比較）而して昔は實際此の句に戰を預想してある通り、絶えず戰爭があつたのである。今は既に夫が轉倒して戰爭の方が一時で平和の方が永いから『地の極まで戰を止めしめ給へ』と云ふ應答の方が遙かに適當して居る。

災害を防ぎ大せる祈禱

其他祈禱書中には現代の我儕が使用するに餘り言葉の强過ぎるものがある。例へば「嘆願」中に時々省畧さるゝ部分又臨時祈禱の戰爭、平和、饑饉、洪水、旱魃等の如きものは、現今の常態より一層同族や自然界の災難を多く蒙つた時代に書かれたものであるから非常に强い言葉が用ゐられて居る。勿論自然界の偉力中今尙戰慄す可きものは尠くない、

殊に此の國には其の事が多いが、然し政府の保護と科學の進歩、及び交通の改良等は是等の災害を和らげて居る。從て是等の祈の或るものは一層現代に適する樣改正されなければならぬ。

第十八章　一般特禱

第一特禱

早晩禱で第一に用ゆる特禱は前主日聖餐式の特禱であるから無論毎日同樣なものを繰返して居る、但し聖日には殊に其日の特禱を用ゐる。又時として第一の特禱が二つ使はれることがある。即ち降臨節と「クリスマス」と除夜の間及び大齋節である。更に受苦日には三個の特禱が使用される兎に角特禱は其の日に二個あつても三個あつても皆其の日の主要な事を祈つたものである。兎に角、此の特禱は禮拜式中殊に變換されるもの丶一つである。

禮拜式の不變に就て

予は先づ禮拜式が變換されるといふことに付て一言したいと思ふ。世人は往々我らの禮拜式を目して何時も同樣であるといふ、然し一見其同樣と見るものが奈如に其の實質に於て變化に富んで居ることであ

らう。勿論早晩禱式の構造即ち順序、部分又は其の部分の比例の如きものは何時も同様である。夫故他日今少し趣の異なつた禮拜式が早晩禱の何れにか作られたならばよいとの願もあるが、夫れとてたゞ願はしいといふだけで、今直ちに夫がなければならぬといふのではない。又晩の傳道的集會などには未信者以外の者も多く集まるから今少し自由な禮拜式を採りたいと思ふならば簡單で祈禱書を要さない式が行なはれぬではない。唯然し多くの信者が列する禮拜式では變化と莊麗に富んだ祈禱書を使用するのが正當である。

變化せざる部分

偖て毎日の早晩禱で何時も變らない部分は僅かに懺悔、赦罪、主禱及次の短句、信經と問安、短句、普通感謝、「クリソストム」の祈及び『願くは主イエスキリストの惠』等である。

變化する部分

頌歌は早晩禱に依て異ひ、其の上に二三の換歌がある。第二第三特禱も前同様の變化がある。日、水、金曜日に用ゆる「リタニー」は代禱の代はりとなるのであるから是れも一つの變化である。毎日の特禱は少くも毎週變更され詩篇は一ヶ月中の毎日が異がひ、日課は一年中の毎日が異ふ。是れ實に熟慮より出たる正則の變化ではあるまいか。

特禱の構成

特禱は面白い様に其の構成を同じうして居る而して若し我々が或る一事に付て自由祈禱をする場合に此の特禱中の或る型に倣つて行へば何時如何なる風に祈の結末をつけてよいかといふ様な惑がなくなる。

其の型とは次の通りである。

(イ)神の稱呼。常に其の願に適したる神性を呼ぶ。

(ロ)特別な懇願を献げる理由。

(ハ)懇願。

(ニ)結末。常に『イエス、キリストに依り』或は此の種の言葉より成る。

(ホ)「アーメン」の唱和に依て會衆之に同意を表す、以上の内(イ)と(ハ)と(ホ)は何時も缺かすことはないが(ロ)は時に略される。又(ニ)には時に長い語が附言されることがある。例へば『俱に在まして世々統治め給ふ』と言ふ樣な語、又降臨節の第二第三主日大齋後第一主日の祈はキリストに献げらるゝ祈であるから『父と子と聖靈と俱に在して世々統べ治め給ふ云々』といふ言葉が加へられる又クリソストムの祈の樣に全然(ニ)の部を省くこともある。

特禱の年代

特禱の大部分は法王ゲラシアス(紀元四九五年)及グレゴリー(紀元五九五年)の『サクラメンタリー』に見えるから餘程古いものである。然も是が亦法王の手に依て在來の特禱を集錄されたと云のであるから實際何の位古いものであるか判らない。聖クリソストム(コンスタンチノープルの教區長紀元四百年)の祈は既に彼よりは二十年代も先のカパドシアの聖バシルの『成文禱』にも見える。總じて特禱中『主イエス、キリストに依りて希ひ云々』の句は大抵後から追加せられたもので、是れは主が『凡そ我が名に託て父に求むる所のものは父必ず之を爾曹に授けたまふべし』と宣まふた言葉に則つたものである。

追加

改革時代の特禱

改革時代に編作された特禱は極く僅かであるが内には非常に立派なものもある。然し概言すると古い拉典語から英語の祈禱書に移されたものに比べて、莊嚴の點が優ると、簡潔でない。(降臨節第四主日、現異邦後第六主日、昇天後主日)

是れから早晩禱の第二、第三特禱に付て二三の註を附さう。此の註は禮拜式中の他の祈禱を研究する上に、幾分の指針とならうかと信ずる。而して又恁かる研究は自分の敬信の資となるのみならず他を導く上

早禱の特徴

に効果のあるものである。

（上）早禱の第二特禱は『平和のため』の祈である。第一聖句の引用に注意せよ。

次に此處で求める平和は内なる平和即ち主が『我が平安』と稱せられたものである。此の平安は境遇の平穏から來るのでなく彼の小兒が父に抱かれて安々と眠るが如く完く神に依頼む安心から來るのである。是れ實に優美にして靈的な祈禱ではあるが、決して順境と安逸の生涯を求める祈禱ではない。

早禱の第三特禱は『恩惠のため』の祈である。

此の祈の最初の言葉は感謝の意を含んで居る。

其の語の中には祝福を受けたことをも認めて居る。

而して次は護に付て祈つてあるが、唯世の危険に付て守護を求める計りでなく、（一）罪（二）過誤（三）義務の怠慢に付ても求めて居る。故に此の祈も靈的である。

晩禱の特徴

（下）晩禱の第二特禱は『平安のため』である。

此の平安も世の與ふることの出來ぬ神の平安を求めて居る。而して夫れに附帶して我らの意志でなく神の意志を行ふ決心が記されてある。（尚『諸般の聖き望、よき意、たゞしき行の原なる神よ』とある神の屬性と『我らをして主の誡に從ふことを決心せしめ』といふ初半の祈願との關係を考察せよ。）後半にある祈願は恐れのない生涯を求めて居るので早禱のと殆んど同樣である。

第三特禱は『求祐のため』の祈で「コムプリン」及び遲い晩禱に適して居る。此の祈は明かに撒利加亞書第十四章第七節の『夕暮の頃に明くなるべし』との句を引用して居る。夜の恐怖と危険が祈の主題で此の祈は『お

休みなさい』或は『父よ我が靈魂を汝の手に委ぬ』(詩三十一〇五)といふ樣な類のものである。此の特禱を二時或は三時の晩禱に使用すると多少奇異な感じがする。

代禱と臨時祈禱

第十九章　代禱

第三特禱に次いで爲さるゝ祈禱は悉く特別な人の爲に献げらるゝ代禱である。即ち天皇のための祈、皇室のための祈、聖職と信徒のための祈及び萬民の爲の祈である。此の萬民のための祈は固と英國の早晩禱式には印刷されてない。從て英國の禮拜では之を使用しないのが普通で使用する時は臨時祈禱から引用するのである。尙此の種の代禱に臨時祈禱があるが、是れは特別な場合に式の中に挿入するものであるから、別な所に一括して印刷されてある。臨時祈禱は本來人の爲の代禱であるが、我ら自身の爲に祈るものも含まれてある。然し夫れは極く格別な場合即ち戰爭や疫病の時だけである此點は臨時感謝も同樣である。

臨時祈禱の年代

臨時祈禱及臨時感謝に付ては今左の諸點を記するに止めて置く。

予の知つて居る所では是等の祈禱が極近代に作られたものであつて、聖職按手の二祈禱を除くと大低改革時代又は其後のものであると謂ふことである。

又是等の祈禱は多少古い特禱の雛形に倣つて作られたものであるが、概して近代的の跟跡即ち古いものよりは優雅であるが繁雜で細部に亘つて居るといふ缺點を免れぬ。

「天皇のため」

偖て是から常用の代禱の説明を試みよう。

(一)天皇のための祈を何故初めにするかといふことは、聖パウロの教訓で明瞭である。(提前二〇一、二)即ち基督者のなす第一の代禱は王のためになせ、假令其の國王が信者でなくとも之に變りはないと錄されてある。

「皇室のため」の歴史

(二)皇室以外の祈禱には皆其の前置きとしての短句應答があるが、獨り皇室の祈には之に相應するものがない。是れは英國史の不思議の事情が偶然にも然らしめたのである。元來祈禱書に今日ある樣な短句の全部が載せられたのは幼帝エドワード六世の治世である。而して彼に次で即位したのは異母姉妹メリー、夫れに繼いだのは亦異母妹のエリサベス女皇である。皆子なくして死し、二人は婚姻の式を擧げなかつた。依て次に皇位を繼承したのが皇の從弟ジエームス一世である。彼の母と前女皇とは皇位繼承の競爭者で後は善くいつて其友たるに過ぎなかつたのである。然れば當時ジエームス一世の時代になる迄は皇室のために祈る必要は毫もなかつたのである。諸君は茲で天皇と皇室が奈如に至聖な任務を執り行はれて居らせられたかを考へなければならぬ。實に皇室の要せらるゝものは裕かなる聖靈の賜で

「聖職と信徒の爲の祈」の年代

ある。

(三)聖職と信徒のための祈はゲラシアスの「サクラメンタリー」に錄してあるから隨分古いもので從て古代祈禱獨特な特色を帶ひて居る。聖靈の注がれることを清く輝き、鮮に繁き露滴に比してあるなど非常に優雅である。是れは恐らく詩第百十篇三節にある『朝の胎より出づる少きものゝ露』といふ句や第百卅三篇三節の『ヘルモンの露くだりてシオンの山に流るゝが如し』といふ樣な句から來たものであらう。

萬民の爲の祈

(四)萬民のための祈は其後に獻げらるゝ普通感謝と共に英國祈禱書中最も新らしく、紀元一六六一年以降に使用されたものである。然し是れは他の祈禱よりは餘程長い時日と種々古い雛形から編作されたものであるから、從て祈禱書の中でも最も靈味に富み優雅にして價値あるものである。

分類及註

更に今少し細部に亘つて御話しよう。

萬民のための祈は三部から成つて其の祈禱を約言すると左の通になる。

(一)凡ての人が基督者となる樣に。

(二)凡ての基督者が善き基督者となる樣に。

(三)特別な願求を有する者が之に合ふ恩を與へらるゝ樣に。

(一)に付ては(イ)神を呼ぶに創造主、護り主としてあるに注意せよ。他に之に優さる稱號があらうか。神は其の受造物、其の護る物を愛せぬであらうか。(ロ)我儕の日常禮拜中には未信者のため祈ることが比較的少ないが、茲にも其缺點が見える、夫故家族の祈なぞで特別に此事を祈らぬのなら『殊に此の國の人々に』といふ言を加へると傳道地の使用として適當になるであらう。(ハ)此の祈の句は詩第六十七篇二節から引

用したものである。

(二)次の部は信者のためである。(イ)教會のため否全世界の教會即ちキリストの新婦或は體が凡て善き狀態にあらむことを祈つてある。(ロ)而して全體の健全は個人の健不健に基くものであるから『自らキリストの信徒と稱ふる者』の爲に次の事を求めて居る。(ハ)即ち——

一、穩健なる教義、『眞理』
二、內部の統一
三、外部の調和
四、聖き行爲

此の外我らの祈る所のものがあらうか。教會の統一に付ても格別に祈る要のないときはこゝに含まれて居る祈で充分である。

*統一のための格別な祈禱は「臨時祈禱」中「信徒一般のため」を用ゆ此の祈は英國にて即位式の禮拜に特禱として用ゐらる。

(三)第三部は特別な願求のある者又試にある者のための祈である。從て父の愛に訴へて左のなやみある者のため祈つてある。『心に、身に、生計に』。此の分類は殆んど各方面を網羅し盡して居る觀がある。

『患難ある人々』。此の中には失敗、病身、悲痛、罪に苦んで居る者、又將に是等のことが身に降りかゝるが爲めに恐れを懷いて居る者も含まれてある。而して此の患難ある人々と云ふ次に特別な願のある人の名をいふことが出來る。

而して我らは斯かる人々が神の救にあづからんことを祈る。勿論細部の方法などは言擧げせず專ら無限なる神の智慧と御力に委ねてあるのである。

兎に角何れの場合にも『苦楚を忍ぶ力を』と願つてある。是れは患難の下

にありて尚且つ善を爲し之を利用することが出來遂に之が斯らす凡ての福を受け終に『福なる途に』到らん爲である。

尚此の祈の部分々々を精細に書かれたものが臨時祈禱の中にある饑饉、疫病、旅行者のため等の祈である。

此の祈禱は我々が祈を纏める上に又願ふべきことを所理する上に良い模範を示すものである。簡單であるが領要を得て居る。靈的であるが然も不幸なる者に同情を現はして居る、各方面の試を列擧して居るけれども繁に流れて居ない。斷定的に書かれてあるが神に委す可きことは委かしてある。

自由祈禱では此の祈より四倍の言葉を使つても此の半分の意味も言表はすことは難かしいと思ふ。

感謝と臨時感謝

第二十章　感謝及結末

公の禮拜で個人に關する祝福を詳細に感謝することは前述の通り困難であるが、國家公會及會衆といふ樣な一般に關した特殊な祝福を感謝する場合になると、其困難は薄らぐのである。臨時感謝は臨時といつても先づ預定の出來る場合の感謝を祈禱にしてあるのである。夫故眞の臨時となると、勢ひ特殊な出來事に應じた特別な禮拜式が行はれなければならぬ。又年々歲々同じ樣に起る國祭收獲なぞにも特別な感謝式を要するものがある。

一般感謝の特色

反之一般感謝は日常我らが存在して居る上の恩寵と靈的祝福とに就て、毎日感謝すべきものを記るして居る。元來敎會に來る一つの目的は神に恩寵を謝するにあるのである（勸告文參照）。夫故此の一般感謝

を省略して全然公禱の一要素を沒却し去るのは甚だ容易ならぬことであるから何か他に確固たる理由がなければ決して爲す可きことでないと予は思ふ。

年代

一般感謝も萬民のための祈と同じく改革時代の晩年に始めて作られたもので、英國の祈禱書に編入されたのが紀元千六百六十一年である。而して該祈禱書は是を編入したいけで優に其前の祈禱書を凌駕する

分類

に足ると云ふ可きである。更に此祈禱が祈禱書の花であることは公會の内外共に承認する所である。此の時以來亞米利加及び其他で爲した祈禱書の追加は大抵特別な場合に献ぐる感謝と祈禱に關する有用なもので、眞に優れたものもあつたが此の祈に比敵するものは一つもない。偖て是れからこの祈を詳細に調べよう。是れは四部から成つて居る。

(一)神の恩德の普き事實を認めてなせる感謝の言葉。此の句中殊に注意す可きことは神の恩德を感謝するに、唯我らの身上のみならず他のことをも記憶えて「主の祈」の精神に倣へることである。

(二)特殊なる二種の恩德を認めてなせる感謝の言葉。即ち(イ)存在の恩德としては創造と保護及び生を樂む爲に與へられたる凡ての良きものに付て感謝し(ロ)イエス、キリストに依れる特別な靈的恩德としては、救贖、神の愛の啓示、及び是等の恩惠を眞に我がものとなす爲定められたる恩惠を受くる法に付て(サクラメント、聖書等)又終りに榮光ある來世の希望に付て感謝して居る。

(三)以上は吾儕が献げた言葉の感謝であるが、夫れに伴ふ可き行爲の感謝はたゞ己を神に献げることである。歡喜に充ちて神に事へ、其よしと見たまふ世を送り、聖名に榮光を歸することである。

然し斯る感謝の祭もキリストに依て始めてなし遂げ得るので、己が力だけでは到底成就することが出來ぬのである。

(四)全體の結びとして適當な頌語が記されてある。

雜多な會衆が是れより更に適當な眞實な言葉を以て感謝する事は到底不可能である。教會で歌ふ讃美歌には往々眞の聖徒や眞に悔改めた者でなければ口にすることの出來ぬ歌があるが、一般感謝の此の句は全然夫れ等と趣を異にして居る。又茲に言ひ表はされた事柄を一層簡潔な言葉で言現はすことは到底出來まいと思ふ。

兎に角日常禮拜の感謝の部は此の言葉で其の終りを飾られて居る。

結末

「クリストムの祈」と祝禱

クリストムの祈

聖徒クリソストムの祈と稱せらるゝ此の特禱の構成に就ては前に述べたことがあると思ふ。此の祈の作者は判らぬが既にコンスタンチノープルの教管長金口ヨハネ（紀元四〇〇年）が之を用ゐて居たことは明かである。

これはキリストに捧ぐる祈

此の祈が父なる神に献げるものでなく、キリストに献げるものである事は左の二點即ち——

(イ)キリストの聖名に依りてとしてないこと。

(ロ)キリストの約束の言葉即ち『わが名の爲に二三人の集まる處には我れも其の中にあれば也』（太十八〇廿）を引いて祈つてあるので明かであ

る。

其位置に就て

又何故此の祈が早晩禱式の終りに置かれてあるかといふに、此の祈の中にはキリストの約し給へる言葉を想起させる句があると共に禮拜の各要素を纏める言葉があるから其處で之を用ゐて今迄爲した不完全な禮拜を主に献げ御許にて其の誤を正し足らざるを補ひて天の父に献げらるゝ樣願ふといふ主意からである。

五個の註

更に二三の註を試みよう。

(一)二三人でも一つの會衆は組織されるのである。人若し二人共に居たならば其祈は二人で一緒に献げらる可きである。此の約束はたゞ教會の禮拜に於てゝなく家族の祈でも同樣である。『餘り人が少ないから祈を止めませう』といふ樣なことは誰れも云ふことの出來ない言葉である若し二人居たならば毎日の早晩禱は廢止す可きでない。斯る祈にも裕かなる祝福のあることはキリストの約束である。

(二)我々が禮拜に集るのは各自が別々に祈禱をする爲でなく、凡てのものが『心を合せ』一つとなつて共同の祈禱歸依を献ぐ可きである。而して此の共同の禮拜に連り之を愛することの出來るのは神より來る一の恩寵である。

(三)『我等の益をはかりて』。我等は既に前の祈禱の中で種々自の好むものを求めたが、爰では眞に夫等のものゝ中で神が我等の益になると認め給ふ者のみを與へ給へと祈るのである。

(四)『望と願を遂げしめ』。或るものは求め、或るものは望んだゞけである(そは餘り個人的な祈であつたから)然し主よ此の望みも又願として受納れ給へ。又或る願は之を祈の中に述べたが雜念のために之を強く感ずることが出來なかつた。主よ我らの怠をみそなわし此の願を受

け給へ。

(五)又我らの益となること即茲にある主の道をさとり後世の始終き生命に付ても願つた。是等は吾人が躊躇する所なく神に求めることが出來るものである。

祝禱と聖句

祝禱――禮拜式は自然或る種の祝禱を以て終る樣になつて居る。夫故吾らの祈禱書には主に聖書の句から數個の祝禱がとつて載せられて居る。例へば聖餐式の終りには完備した祝禱があり、信徒按手式の後には『監督の祝禱』と稱せらるゝものが用ゐられ、大齋懺悔には民數記略第六章第廿四―廿六節から採つた祝禱が錄されてある。其他聖書中には別な祝禱がある。即ち撒母哥前書第五章第廿三節にある『願くは平安の神』といふが如き希伯來書第十三章第廿、廿一節にあ

早晩禱の祝禱の特色

る『願くは窮なき契約云々』といふ樣な非常に立派な句で是等は時々用ゐられる。

早晩禱の終には哥林多後書第十三章の末節から使徒の祝禱と稱せらるゝものが撰まれてある。是れは長老計りでなく執事傳道師も用ゐることが出來る。其理由は此の祝禱が神の特別な任命を受けた人でなければ出來ぬといふ樣な權威的動作を現はすものでなく、祈禱の形式を帶びて居るからである。從て之は跪づいたまゝ稱へらるゝのである。此の祝禱で左の二點は特に注意す可き點であらう。(イ)是れは聖三位の三格が最初に記された記錄であり、且つ其聖名が併稱されてある所を見ると三位は一つで然も同等であるといふ事を現はして居る。(ロ)是れは固と式のために作られたものでなく、後世に至つて式に用ゐらるゝ樣になつたのである。尙茲には聖三位の屬性が明かに區

別されてあるから之に由て益を受くることが尠くない。即ち父の愛、キリストに依てあらはれし神の恩寵、聖靈の交際即神と教會とに於ける一つのつなぎは聖三位の働であることを現はして居る。

共同の禮拜　終

跋

一、ウヰリアム、ラムセー其著「旅行者及羅馬市民としてのパウロ」に序して曰く『教授テオドル、ベンフィーの薫陶の下に予は近世的態度の一大學者と密接の關係を結び、文學的研究の近世的方法に就て一種の見識を得たり』と。予をラ氏に比するは固より僭越なり。然れ共恩師オードレ監督がベ氏の如く、生等を薫陶して學究心を煽へしめたるは恰も之と同じ。恩師は眞に學者なり。

一、學者なる恩師の遺著中、本書は特に禮拜の根本的原理と實際的教訓とを合せ教へられたるものにして、文簡勁、意暢達、暗示に富む。

一、是を拙劣なる邦語に譯す、眞に慚愧の至に堪へず、唯恩師の寛容を

信じて上梓し更らに版改まるの日一層の洗練を加へんことを期す。思ふは初めて師に率ゐられて説教の通譯を爲せる日なり、師、莞爾として予の肩を打ち、「よくなせり、是れ始めなり」と。偶然にも予の處女譯は亦恩師の語を譯するに至りぬ。製釘成りて一本を墓前に獻ぐる日、在天の師更らに初めの言を繰反されむことを。

一、今井先生特に序を賜ひ、會心の友草稿の校正を助けられし記して永く感謝の意を致す。

明治四十四年八月

佐々木鎮治謹識

明治四十四年八月廿二日印刷
明治四十四年八月廿六日出版

不許複製

譯者　東京市芝區榮町八番地　佐々木鎮治
發行者　東京市神田區小川町一番地　イ、ライアソン
印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉
印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行所　東京市神田區小川町一　普光社
販賣所　神戸市中山手通り三丁目外五番　日本聖公會出版社
仝　大阪市西區京町堀三丁目　榮光社

普光社出版書目

（一）

△聖書に關するもの▽

舊約聖書之眞價

パチエラー、オブアーツ
エル、チーエーチ　岩井順一譯

菊版總クロース貳百頁
定價金七拾錢
郵税金八錢

KIRKPATRICK.—The Divine Library of the Old Testament.
Translated by Rev. D. J. IWAI, B. A., L. TH.

凡そ何れの時代にありても、舊約聖書研究に貢献する所、舊約聖書より學ぶ所なかる可らず。而して現代がその研究に貢献すべき所はその起原發達の史的研究にして、そのこれより學ぶ可き所は神がその選民の爲又世界人類の爲その目的を遂行し給ふは確乎として思議す可らざるものありとのそれなり。然るに我國にありて新約聖書の重ぜられ。舊約聖書の輕ぜらるゝ傾きあるは慨して又嘆す可きなり。これ本書の譯出せられたる所以にして、本書は主として舊約聖書の起原を人的方面史的方面神的方面より考究し、最後にその價値の問題に及べり。我盟亦著者と共に本書が「此の如きこと果して有か無かを知らんとて聖書を究めん」動機とならんことを切望す。

第一章　舊約聖書の起原（上）　第二章　舊約聖書の起原（下）　第三章　舊約聖書保存　第四章　舊約聖書の靈感　第五章　舊約聖書の基督教會に於ける價値

ミス、バラード俗解

通俗創世紀

再版　定價金拾錢
郵税金貳錢

BALLARD.—Selected Portions of the Old Testament in Colloquial.—Genesis.

舊約聖書中難解の創世記を誰にも解り易く俗語に書き流したので、少さな方にもすつかり分ります。

△教會に關するもの▽

基督の全聖公會に於ける日本聖公會の地位

アーチデーコン、エ、エフ、キング氏著

定價金五錢
郵税二錢

The Nippon Seikokwai in its Relationship to other Christian Bodies in Japan
by Ven A. F. King, M.A.

此小册子は日本聖公會私論の第一にして題目の問題を完全に説明せるものなり、多くの教會員は只『何故に吾は聖公會に屬するや』を問ふのみならで、『吾は各種の基督教徒の團體に對して、如何なる地位にあるべきやを問ふ。アーチデーコンキング氏は愛の心を以て、此難問に答へんとせるなり、順序を追ふて。氏は羅馬教會、希臘教會其他の基督教會に對する吾等の地位を論じ盡せり。

聖公會こ祈禱書

アーチデーコン、キング氏著

一部金三錢

Our belief in the Holy Catholic church, and its Influence on our Attitude towards the Book of Common Prayer
by Ven A. F. King, M.A.,

日本聖公會私論の第二にして、著者の得意とする問題を扱へるものなり。第一は『聖公會を信ず』と告白する時、吾人は如何なる意味をその中に持つやを説き、第二に及びて此信仰は祈禱書に對する吾人の態度に如何なる影響を及ぼすやを説けり。

聖公會之立脚點

長老　イー、ティアソン編
執事　榊原彌譯

再版　定價金三錢

What the Church Stands for.
Second Edition.

何故に吾は聖公會に屬するや、ヒューロンの監督は吾等に語るに英國教會員の特權を以てし、他の基督教會には何等言及する所なし、只此書の目的は吾等の闕漏の如何ばかり偉いなるやを示さんとするものなり。

長老菅寅吉譯

教會之起原

四六版 上製金五拾五錢 並製金四十五錢 郵税金六錢

RACKHAM.—How the Church Began.
Translated by Rev. T. KWAN.

我等は教會の一員として其完全なる發達を望むものであるとすれば、その如何にして起つたかは實に研究すべき題目である。殊に昨今合同問題一部に起りし折柄、これは趣味ある問題である。本書は使徒行傳に精通せるラックハム氏の著で、此問題を研究せんとするものは一讀すべきものである。加ふるに平易通俗を旨とせるものなれば、初心なる人々の教會といふものを研究し、使徒行傳を研究するもの〻爲にも一書を座右に奬むるのである。

第一章 準備 第二章 ペンテコステ 第三章 迫害 第四章 教會の生命 第五章 殉教者ステパノ 第六章 傳道者ピリポ 第七章 サウロの改心 第八章 コルネリオの入會 第九章 アンテオケの教會 第十章 エルサレム會議

受苦日禮拜順序

一部金六錢

Three Hours.

これは新禱書によつて編纂したもので、此小册子と古今聖歌集を持つて行けば、他には何もなくても受苦日の禮拜に列席して有用なる教訓を受ける事が出來ます。

細貝邦太郎譯

基督教師父傳

四六版クロース百五十頁 定價金四拾錢 郵税金四錢

PERRY.—The Christian Fathers.
Translated by K. HOSOGAI.

師父の生涯は教會の花なり。師父の殉教は教會の實なり。見よ。師父等は其信仰を持せんとして如何なる困厄に遭ひしか。或は猛獸の牙あり。或は烱々たる烈火あり。或は殘忍なる刄あり。其間に處して孤節を完うせる千歲の下餘芳ありといふべく。今尚吾等の信仰の模範たり。師父たるなり。

聖イグナシウス傳 聖ポリカープ傳 聖ジャスチン傳 聖イレニウス傳 聖シプリアン傳 聖アタナシオ傳 聖クリソストム傳 聖アウガスチン傳

元田作之進著

日本聖公會史

四六版二八〇頁 定價 並製金三十五錢 上製金四十五錢

History of the Nippon Seikokwai
by Rev. S. Motoda, Ph.D.

我らは近く開教五十年を送りて、益々發展の機運に向はんとするものなり。顧みるに五十年の星霜決して短しとなさず、幾多の教傑は其中にあるべし。許多の悲史活史は其中に起伏せん。今にして吾等之を讀む。多大の教訓其中にあらん。

目次 緒言 第一章 宣教時代 第二章 組織時代 第三章 發達時代 第四章 聖公會の事業

268
262

020402−000−2

特18−488

共同の礼拝

ウキリアム・オードレ／著

図版

M44

ABI−0211